

ポストコロナを語る

新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が全国で解除され、少しずつ日常が戻りつつある。私たちは世界を覆うこの災厄から何を学んだのか。九州・



事務所提供

「くまモン」の生みの親、放送作家

小山薫堂さん

こやま・くんどう

1964年、熊本県天草市出身。放送作家、脚本家。5月にスタートした、地域活性化やコミュニティ再生に向けた公民連携のプロジェクト「コロナと闘う応援村」で共同発起人を務める。

人を思う力鍛えられ

山口ゆかりの識者や著名人に話を聞く新連載「ポストコロナを語る」。初回は熊本県のPRキャラクター「くまモン」の生みの親として知られる放送作家の小山薫堂さん(55)に伺った。

◆ 一つの疫病で社会がこ

んなに大きく狂い、人間は奇跡の重なり合いの中で生きていくということに改めて気付かされました。自粛中にオンライン会議システムが広がり、僕のラジオ番組もリモートで収録したのですが、初めてインタビュ

ーする人とは面と向き合っ

て話しやすいようです。本当に必要なものは何なのか、そうでないものは何なのか。今まで「変えなければ」と言いながら惰性で続けてきたことについて考え、変わるきっかけになったと思っています。

◆ リモートの働き方が広がり、東京や首都圏、九州

ているという話を聞き、古里の天草から養殖の本マグロを取り寄せてみました。これがびっくりするぐらいおいしくて。今まで知りませんでした。

◆ 「応援する」とは人に気を配る、心を寄せるということ。マスクを着ける

ました。

一方で僕の会社でもオンライン会議を取り入れたところ、若手が発言するようになりまし。普段の会議は大きな部屋で30人ほどが対面し、話す人が限られていたが、ビデオ会議は声の大きさも立場も関係なく、平等に発言を割る振

なら福岡など都市部に一極集中する意味はなくなりつつあります。僕の周りでも地方に移住を考え始めた人がいます。心地よい暮らしを求めて地方に目を向ける人が増えれば地方にも可能性が出てきます。例えば新型コロナウイルスの影響で消費が少し鈍くなって生産者が困っ

たのも、もし自分が感染していた場合に「うつしてはいけない」という思いが働くから。新型コロナウイルスへの対応を通じて、人を思う力は一層鍛えられました。終息した後も同じように愛をもって社会に接していきたいですね。【聞き手・青木絵美】

随時掲載